激動の世界は今

対欧州最前線　緊迫するロシアの飛び地で行われる「記憶を巡る戦い」

国際 | 最新記事 | 欧州 | イチオシラベルあり

毎日新聞 | 2026/11/8 11:00（最終更新 11/6 11:51）　有料記事　1921文字



戦勝記念公園での追悼式典のため、当時のソ連兵の軍装を再現した人たち＝露西部カリーニングラードで2026年9月22日、真野森作撮影

ウクライナ情勢を巡りロシアと北大西洋条約機構（NATO）の対立が深まる中、バルト海に面した露最西端の飛び地・カリーニングラードは緊張の最前線となっている。現地ではかつてドイツ領だったこの地域をソ連軍が「解放」した歴史が強調され、「記憶を巡る戦い」においても最前線になっていた。【カリーニングラードで真野森作】

「1945年4月の攻略戦で、ソ連兵1200人が命を落とした。彼らは数千の同胞、数百万の欧州の人々をナチスによる奴隷状態から解放した。この地は、歴史的宿命と共にある」

快晴だった9月22日、カリーニングラード市内の戦勝記念公園にアナウンスが流れ、ソ連兵追悼の式典が始まった。

「攻略戦」とは、第二次大戦末期に、ソ連軍がドイツ領東プロイセンのケーニヒスベルク（現カリーニングラード）を陥落させた戦いを指す。司会の女性は「彼らの英雄的な行為は現在、（露軍が2022年からウクライナで続ける）『特別軍事作戦』にて子孫たちに受け継がれている」とも強調した。

これは露大統領直轄の国立歴史記憶センターが主催した内外記者向けのプレスツアーでの一場面だ。エレーナ・マリシェワ所長や州幹部、青少年の愛国運動組織「ユナルミヤ」（若き軍隊）の隊員らが赤いカーネーションをソ連兵追悼記念碑にささげた。

続いて地元の郷土史家、アレクサンドル・シチェグロフ氏（64）が往時の「ナチスによる蛮行」を解説した。「欧州各地からこの地へ膨大な数の捕虜と強制労働者が送られ、大規模な収容



戦勝記念公園でのソ連兵追悼式典に参加した、ロシア国立歴史記憶センターのエレーナ・マリシェワ所長（手前右）ら＝露西部カリーニングラードで2026年9月22日、真野森作撮影



C12○1・カリーニングラード州.eps



ドイツ領東プロイセンのケーニヒスベルクだった当時、ナチス・ドイツの秘密警察「ゲシュタポ」が使用していた建物（右）＝カリーニングラードで2026年9月22日、真野森作撮影

所や、彼らが売り買いされる労働交換所があった。欧米人の捕虜は良好な環境で収容されたが、私たちの同胞は大勢が虐殺された」

市内と州各地には、ナチス・ドイツの秘密警察「ゲシュタポ」が使用した建物、ギロチン台による処刑が多数実施された刑務所、ユダヤ人数百人が絶滅収容所行きの貨物列車に乗せられた鉄道駅など、暗い記憶の史跡が残る。

第二次大戦後、独領東プロイセンは南部がポーランド領となり、北部はソ連に割譲されてカリーニングラード州となった。その際、ドイツ人住民が東独などへ追放され、代わりにソ連各地の住民が送り込まれた歴史がある。この点では、日本の北方領土や南樺太（サハリン島の南半分）と似た構図と言える。

「ナチスによる集団虐殺」

露政府は現在、「大戦中、ナチスはソ連人民に対する集団虐殺（ジェノサイド）を行った」と訴える啓発活動を強めている。その一環で、カリーニングラード州でも関連史跡の公式見学ルートが設定された。

啓発活動を率いるマリシェワ氏は「（ルートをたどることで）ナチズムへの強い拒絶感と、その犯罪を後世に伝える責任への理解が生まれる」と強調した。

戦後80年以上を経た今、ナチスによる凶行と犠牲に脚光を当てる試みには、プーチン政権の思惑が絡んでいるとみられる。露側はウクライナのゼレンスキー政権を「ネオナチだ」と非難し、ウクライナを支援するドイツなど欧州各国との対立を激化させているからだ。

欧州やウクライナ、バルト諸国では反露意識の高まりを背景に、ソ連関連の戦勝記念モニュメントを撤去・破壊する動きが広がった。それに対抗する形で、カリーニングラード市内には昨年9月、各国から消えた記念像をミニチュア版で再現して並べる広場が開設された。



ロシアの青少年愛国運動組織「ユナルミヤ」の隊員たちを前に、第二次大戦中のナチスの蛮行を解説する郷土史家、アレクサンドル・シチェグロフ氏＝露西部カリーニングラードの戦勝記念公園で2026年9月22日、真野森作撮影

シチェグロフ氏は「西欧などにいる現代のナチスたちは既に3200もの記念像を破壊した」と訴え、「私たちは今、ウクライナ国民をナチズムから解放している」とも主張した。プーチン政権と同様の論法で、現代の戦いを対独戦と重ねた。

飛び地ゆえの危機感

14世紀建造の大聖堂や哲学者カントの墓があるカリーニングラード市の旧市街は観光客でにぎわう。だが、州内では現在、飛び地ならではの危機感が高まっている。23年にフィンランド、24年にスウェーデンがNATOに加盟したことによって、NATO諸国に包囲される形となったからだ。露側は有事には核兵器の使用も辞さない姿勢を示す。



第二次大戦の独ソ戦におけるケーニヒスベルク（現カリーニングラード）攻防戦を等身大で再現した博物館のジオラマ＝カリーニングラードで2026年9月22日、真野森作撮影

22年以降、欧州連合（EU）の対露制裁などを背景に、同州向け貨物の一部が鉄道輸送から海運へ代替される動きが起きている。他方で、岩手県に匹敵する広さ1万5100平方キロの州内には田園地帯もあり、ジャガイモ、穀物、肉類の自給に問題はないとされる。

「ほんの数年前まで隣国のポーランドやリトアニアとは友好的な関係にあったが、事態は予期せぬ方向に進んでしまった。当然、私たちは不安を感じている」

元ジャーナリストで、地元ガイドのビクトル・シェリギンさん（57）はこう語り、続けた。「NATOはすぐそこにいる。紛争は望まないが、我々には強力な軍がある。最後まで断固として立ち向かう」

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。
画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.